



『先輩』は死語！？ 大学部活動における上下関係はなぜ変容したのか

研究背景

昔 縦社会の規範を背景に厳格な上下関係

↕

今 コンプライアンスやハラスメントへの意識の高まりにより水平的な関係

本研究では、体育会における上下関係の緩和がどのように進んできたのか、その構造的変遷と現代の実態を明らかにする

体育会が出来た背景

- 契機:西洋スポーツ普及と部活の活発化
- 役割:資金・施設・交渉の一元管理
- 発展:学校対抗戦を通じた規律と校風の定着

先行研究

- 高いレベルで活躍する部活、また文化部よりも運動部において、上下関係がより明確に形成されている。
- 日本人の敬語行動・規範意識が「上下関係重視」から「相互尊重」へと変化しつつある。

立命館大学体育会サッカー部戦績

2004年	全日本大学サッカー選手権大会	準優勝
2006年	総理大臣杯	優勝
2000年、2005年	関西学生サッカーリーグ1部	優勝
1997年、2002年、2006年	関西学生サッカーリーグ1部	準優勝
2023年	総理大臣杯（全国大会）	出場
2025年	関西選手権	3位
2025年	総理大臣杯（全国大会）	出場



専門家インタビュー

産業社会学部
金子史弥

スポーツをする環境の多様化

「教育」から「競技」へ

軍隊の歴史から、礼儀・規律・忍耐を身に着ける
↓
結果を出すことを重視

先輩・後輩の繋がりの変化

長時間を共に過ごし文化を継承
↓
多様な環境の選手が集まるため、固定的な関係が生まれにくい

学校だけでなく、クラブ・ユースなどの選択肢

学校だけのコミュニティ
↓
別の競技力を重視するクラブ・ユースなどコミュニティの多様化

「耐えること」のメリットの変化

厳しい部活動に耐えることで、人脈・進学・就職につながった
↓
厳しい上下関係に耐え続ける必要性の低下

インタビュー

インタビュー相手
立命館大学サッカー部1996年度主将
立命館大学サッカー部2026年度主将

～「絶対的なタテ社会」から「合理的な役割分担」へ～

① 過去：「先輩絶対」の厳しいタテ社会

活動中
プレーや練習においても学年による厳格な上下関係が存在
先輩への絶対的な服従が当たり前の環境
活動外
「先輩」という呼び方の徹底や厳しい規律など
オフの場でも明確なタテ社会の枠組みが確立

② 現在：「実力主義」と「親しさ」の共存へ

活動中
一瞬の判断や技術が問われるため学年の壁が消滅
「年次が上＝偉い」×
実力重視のフラットな関係へと変化
活動外
先輩を愛称で呼ぶなどフランクな関係へ
準備などの裏方作業は後輩が担う「合理的な役割分担」として
先輩が新歓代を多く払うといった面倒見の良さも共存

③インタビューから浮かび上がった変化の理由

- **コンプライアンス意識の向上**
  「ハラスメントという言葉が一般的になり、指導方法も変わった」（OB）
  「大学側からの指導も厳しくなった」（現役）
- **競技環境の多様化**
  「クラブチームやユース出身者が増え多様な価値観が入ってきた」（現役）
  「昔みたいに『体育会＝一つ』ではなくなった」（OB）
- **世代間ギャップの縮小**
  「SNSで普段から連絡を取り合うので、距離感が近くなった」（現役）
  「先輩も『厳しくする』ことが正しいと思わなくなった」（OB）

「教育より競技力を重視する環境の変化」
+
「社会的なハラスメント意識の向上」

上下関係はなくなったわけではなく、理不尽な服従が消え、プレー中の「実力主義」とオフの「合理的な役割分担」

厳しい環境に「耐える」メリットが薄れた現代では、持続可能な組織が最優先

白戸ゼミ　まぎーず